
第3編 原点ともいえる旧松尾村時代

ちねつ - かいほつ

【 地熱開発 】

1. 旧松尾村時代のむらづくり
2. 旧松尾村時代の産業等の変遷

1. 旧松尾村時代のむらづくり

1.1 旧松尾村の基本政策とその歩み

旧松尾村時代のむらづくりの基本政策とその歩み、移り変わりなどについて、「松尾村誌（平成元年9月30日改訂）」および「村報まつお（初期は「村報大松尾」という。1949（昭和24）年8月15日第1号発刊）」、関係者へのヒアリング結果等を参考に整理する。

また、旧松尾村時代については、施策に関する記録が比較的残っている、昭和20年代、30年代、40年代以降（松川地熱発電所の運転開始頃）の3つに区分する。

1.1.1 昭和20年代の動き – 百年の大計を打ち建てる

(1) 松尾村基本計画振興白書

1949（昭和24）年12月17日より4日間松尾村の産業と文化の向上を祈念して松尾村振興祭が行われた。この振興祭に際して当時の松尾村長（藤根順衛氏）は、大松尾村建設の基本計画について発表し、村民の絶大なる協力を要請した。

その内容について、「村報大松尾第5号」では次のように伝えている。

■村報大松尾 第5号 昭和25年1月10日

百年の大計をうち建てなければならない

終戦後、農地改革の進展に伴い土地解放の先駆として入植者及地元増反者によって大いなる成果を収めたのであるが、村の内外より観察した松尾村の状態とはあまりにもかけはなれた現況にあるのであります。…幸にして本村には平和産業の王者、東洋一の松尾鉦山があり、過去30年の間、財政面に対しては勿論、松尾村の住民が此の鉦山の労働することにより家庭生活の土台として農村経済の貧困を補って余りあるものであった。…斯くのごとき天然資源に恵まれ、しかも我が国有数の大鉦山を擁しつつ何故に松尾村の産業及文化の発達を見る事が出来なかつたであらうか。我々は今日此の機会に遭遇して、今にして百年の大計をうち建てなければ松尾村の平和と産業の振興、文化の発達は決して望み得ないのである。

その第一は、輿論に基いた民主的村政の確立。村自治体の正しい運営にあたって村民、各位の盛り上がる力を痛切に待望して止まない。希くば、村政に対して御叱責と御援助を惜しまないよう願う次第である。

参考資料：旧松尾村「村報大松尾第5号」1950年

また、藤根村長は年頭の辞において、「我々の目標は山積しているのであって、今後は振興白書を基本の原則として具体的な事項について決定し、民主的な平和な村を建設するために努力したいと思います。」と述べている。

そして、「村報大松尾第7号」では、松尾村10年後の夢が挿入され、この中で、独立中学校、硫安工場、農産加工場、ミルク工場、松川温泉診療所、病院（診療所）指導農場等は是非10年の中に実現したいものだと思う、と記録されている。

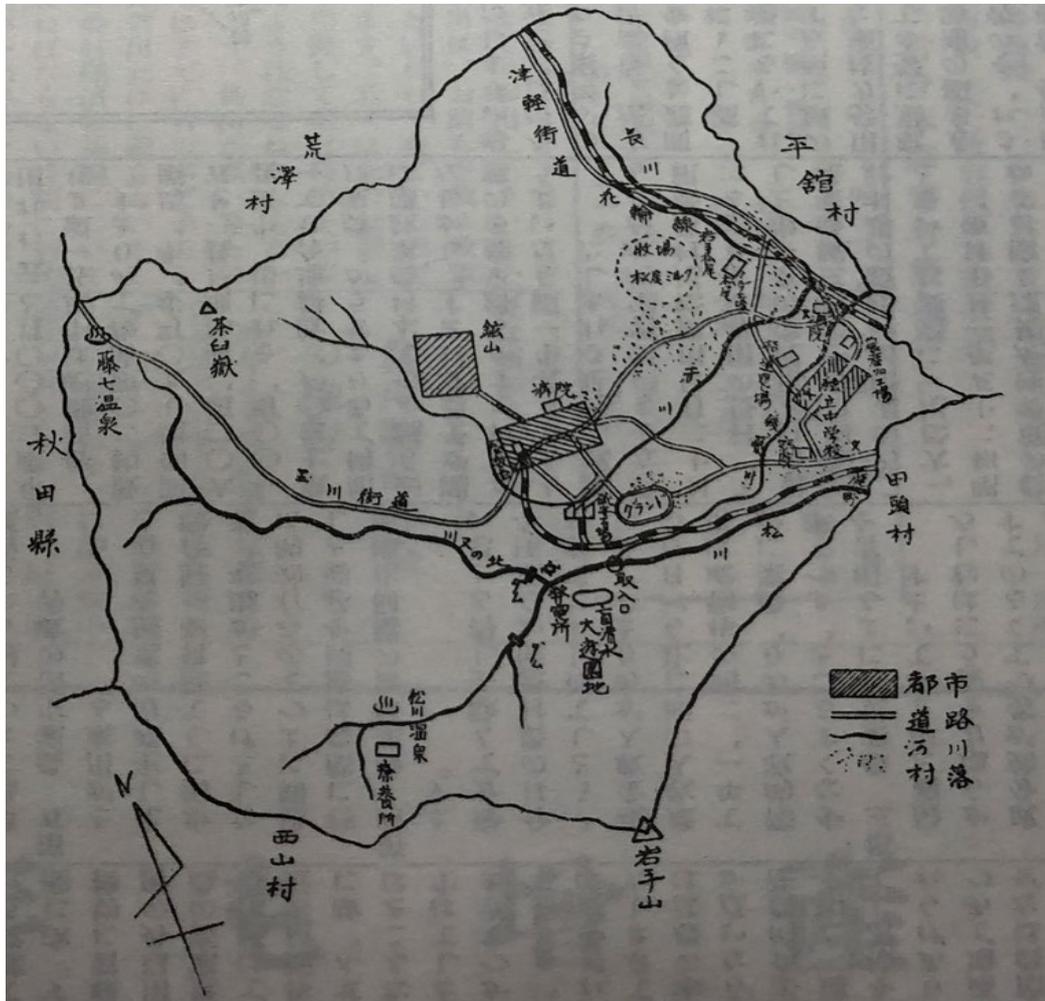


図 3-1-1 松尾村 10 年後の夢
出典：旧松尾村「村報大松尾第 7 号」1950 年

(2) 松尾村総合開発計画

松尾村総合開発計画は、松尾村史上を飾る重大な計画として位置づけられ、1952（昭和27）年7月にその樹立のための協議会をスタートした。協議会は50人の委員と、24人の事務局員によって構成されている。

このころ国では国土総合開発法に基づいて、全国総合開発計画、地方総合開発計画、都府県総合開発計画、特定地域総合開発計画の4種類の開発計画を立てて施策を実施していた。県においてはこれらの法律にもとづいて岩手県総合開発計画を立て、町村にも町村総合開発計画を立てるようにと促していた。

このような背景について、旧松尾村では総合開発計画の性格について、「この村造りは全くの創造であります。改良改造といった程度のものではないと思います。私共はこの計画に参加する根本理念をここにおいて、科学時代、原子力時代であることを思い合わせてこれに当たるべきあると思います。」ととらえていた。

また、1949（昭和24）年12月17日発表の松尾村振興白書は、振興目標を村行政の根本方針とその対策を掲げて村民の協力を求めていた。総合開発計画では岩手山麓の主要地域として、本邦随一の松尾鉱山を有する本村の実態を把握すると共に西根五力村との関連を考え、その課題を設定して恒久的総合開発を樹立するとし、国や県の開発計画とも整合する、村百年の大計をなすような施策立案を目指していた。



図 3-1-2 松尾村総合開発特集版

出典：旧松尾村「村報大松尾第23号」1952年

1953（昭和28）年2月27日に第2回総会において、各専門部において具体策についての慎重審議を重ねられた開発計画は原案通り可決された。

この総会に村長代理として出席していた、沼田宗一助役（当時）は、「本協議会において松尾村百年の大計が答申される事と思われるが村として予算の許す範囲内において努力する。なお、答申されたものが、先ほど会長のお話にもある通り予算面（財政上）において皆々実行されるということは難しい。また、村百年の大計のため本協議会から答申されたものに対して、30年、31年度になっても実施して行かねばならない。」と村当局としての決意を述べている。

1.1.2 昭和 30 年代の動き – 農業・鉱工業・観光をミックスした総合開発

(1) 沼田村政のスタート

1955（昭和 30）年 4 月、新村長に沼田宗一氏が当選した。ここから沼田村政がスタートするが沼田村長は、初議会において村政担当の決意を次のように述べ、それまでの藤根村政時代の松尾村振興白書や総合開発計画を松尾村発展の基本ラインとして基本施策を推進することを表明した。

■村報まつお 第 57 号 昭和 30 年 6 月 1 日

初議会、沼田村長挨拶要旨

従来においても昭和 24 年藤根前村長が発表した松尾村振興白書の正しい見解と多数の村民の支持と論に鑑み、また昭和 27 年の総合開発審議会の答申に基づいて財政面とにらみ合わせて重点的に採りあげなければならない施策を検討し実施して参りましたが、これらは何れも松尾村発展の基本ラインであることは深く共鳴しておりますので、今後においてもこれを基本施策として各種行政の推進を期したいと念じております。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第 57 号」1955 年



図 3-1-3 新村長に沼田宗一氏当選

出典：旧松尾村「広報まつお第 57 号」1955 年

(2) 地下資源開発への基本姿勢

1958（昭和 33）年の新年の挨拶で、沼田村長は、今後の課題は総合開発第二次五力年計画に基づくものであり、経済情勢と本村特有の地下資源開発等の実態から考えて従来の計画を再検討し、将来の恒久的実施計画を樹立するとした。

とくに、地下資源開発については、「松川温泉蒸気利用は目下のところ研究の段階であるが政府機関（工業技術院、科学技術庁）においても重大視するに至りあらゆる調査結果から見て地熱発電の達成は有望視され政府の科学振興施策の線に副い強力に推進しなければならぬと思う、発電事業の完成は工業化対策と観光の進運に期して待つべきものがあり本村財政の確立の上に期待される面が多であるのでこれが推進に努力を傾倒したい。」と松川地熱発電事業への積極的な姿勢を見せていた。

(3) 新総合開発計画の樹立

1958（昭和33）年3月4日、松尾村総合開発協議会（第2回）が開催され、新開発計画が樹立された。

総合開発計画の再検討の背景と方針については、次の記録がある。

「村報まつお第119号」昭和36年12月1日には、松尾村・この一年という特集が生まれ、総合開発計画によって農業、鉱工業、観光の三つをミックスした総合開発として軌道にのり、村民に明るい前途を約束づけてくれたことが記録されている。

■村報まつお 第81号 昭和33年2月10日

計画の樹立方針成る

総合開発計画の再検については、過般の村議会において基本方針につき村長からその構想が明らかにされたが社会情勢の変化に対応すべく、従来の計画を発展的に解消し、新たに建設計画を樹立して今後の指針とするため別掲のとおり新たに委員を委嘱し、第1回総会をさる1月28日午前10時より松尾中学校において開催した。開会の始めに当って村長より大要次のような挨拶があつて後、別掲のとおり『計画の総合目標』『計画樹立の方針』『立案および審議の日程』等が明らかにされた。

本村の総合開発計画は、さきに新興計画をもってその目標を定め、続いて昭和27年松尾村総合開発協議会を設立し、村長の諮問機関として約1カ年にわたり慎重協議の結果、計画費総額3億9千万円にのぼる事業計画を定めて答申せられ、着々その実現に努力して多大の成果を収めたが、昭和30年小職就任するや、社会情勢の変動著しきため、時勢の変化に対応すべく総額9億3千万円に達する第二次開発計画の答申をうけ、行政対策の指針としてその実現に力を注ぎ、その一部は完了しあるいは着手の段階にあります。

しかしながら、今時我が国財政の引き締め政策と経済情勢に影響されて、地方財政の再建が急務とされている実態をよく認識し本村特有の地下資源開発と観光の進運をはかり本村将来の財政運営の確立を期するとともに、更に町村合併促進法に基く既合併町村の建設計画の状態を観察するとき、独立立村を確認した本村として、従来の既定計画を発展的に解消し、財政事情の変化に対応する再建計画を樹立して今後の松尾村施策遂行の指針としたい。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第81号」1958年

1.1.3 昭和 40 年代以降の動き – 地熱と地域が共生する産業と文化

(1) 松尾村総合開発計画策定について

松尾村総合開発計画策定にあたっては、「松尾村総合開発計画」を樹立し、時勢の変化に対応しながら農業、鉱工業、観光の立地的条件を主軸とするスローガンを掲げて強力に実施してきたとしながら、時勢の変化への対応が必要とされていた。

趣旨

松尾村の行政施策の推進については、昭和 28 年、30 年、33 年の三次にわたる本村独自の「松尾村総合開発計画」を樹立し、時勢の変化に対応しながら農業、鉱業、観光の立地的条件を主軸とするスローガンを掲げて協力に実施してきた。しかし、この計画の推進は、昭和 25 年の「国土総合開発法」の施行によって進められた食糧増産（生産増強対策）或いはエネルギー（発電）開発等の基礎条件を重点とする国の開発計画の影響をうけたことと、本村の後進地域という実情から、農業技術の改良、教育或いは社会関係施設等、施設の設置に重要性を置いて計画が進められた関係上、内容の充実にわたってその運営が必ずしも十分でなかったことは遺憾ながら認めざるを得ない。しかしながら戦後におけるわが国の政治経済及び内外情勢の著しい変動期を背景として行われたため、国、地方を通ずる開発計画の実施は、これらの情勢下においては当然の結果といえよう。

最近におけるわが国の産業構造が前述の激変期の時代を背景とした開発政策に起因して、工業地域の集中化等による過大都市の問題、或いは農業人口の他産業への流出等いわゆる経済の「ヒズミ」是正の問題が最大の課題となってきたのである。

国においては、以上のような緊迫した課題の解決をはかるため、昭和 37 年都市の過大化防止、地域格差の是正を基本とする「全国総合開発計画」を策定した。この計画は、拠点開発方式（新産業都市、低工業地域開発、地方開発都市）によるもので、地方総合開発、都道府県総合開発の促進をはかるとともに、国及び地方公共団体の開発政策を一貫した体系に調整しようとするものである。

岩手県においても、これを基調として昭和 39 年 3 月経済圏開発方式による「岩手県総合開発計画」を発表しこれに対応して市町村の総合開発計画の策定を期待している。更に県においては、教育基本計画（昭和 39 年 3 月）、農業基本計画（昭和 38 年 2 月）を定め、教育条件の整備、農業構造改善事業等の推進をはかっている。

本村においては、この期待に対応し地方自治体として総合的な形体をもつ本村の立地条件等を考え、農業の近代化、鉱工業の振興、自然保護と利用の増進、教育及び社会環境の整備等について、本村将来の理想像を明らかにし村民の協力によって村勢の躍進をはかるものとする。

参考資料：旧松尾村「松尾村総合開発計画策定について（建設促進審議会諮問）」1965 年

(2) 地熱発電の成功を信じて 12 年

地熱発電の話が出たのは 1955（昭和 30）年ごろである。沼田村長が初めて村長の職に着いたのがこの年のことで、最初に手がけたのがこの地熱発電だった。そのころ、松川地域一体では、温泉開発を目的とした 7 本のボーリングをおろし、そのうち 3 本からは良質の蒸気が噴出することがわかった。この時、沼田村長はふっと思いついたことがあり、「この蒸気で電気を起こさねえだろうか」と。沼田村長は松尾鉱業所時代、電気関係の仕事にたずさわってきた人だったことが、地熱発電を成功させる力になったとされる。

■村報まつお 第 212 号 昭和 41 年 11 月 15 日

成功を信じて初心を貫いたわが沼田村長

沼田村長は、このことを当時の松尾鉱業所の馬淵探査課長に話したところ、工業技術院地質調査所でそのほうの研究をしているから相談してみたら、といわれ、公文書にして提出しました。

地質調査所の近藤地質課長からは「別府、草津、鳴子などで失敗続きなため、大蔵省から調査費の予算を見合わせるといわれて困っている。せひ協力してくれ」と便りがとどき、さっそく村長は上京、近藤課長に会いました。この結果「ある企業の社長がぜひやってみいたいといっている。名前を伏したまま会ってくれ」といわれました。この“ある企業”こそ、いまの東北工であり、富岡社長と沼田村長のイキはぴったりと合い、いよいよ東北工の登場となるわけです。その後、新技術開発事業団の委託を受けて、東北工は本格的な工事を始め、約 20 億円を投じて、いま、ついに日本で初の、世界でも四番目の地熱発電所を完成させたのです。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第 212 号」1966 年



図 3-1-4 日本に地熱発電をもたらした人
出典：旧松尾村「広報まつお第 212 号」1966 年

(3)「農鉱観」による村づくりに尽力したリーダー

地熱資源の開発や利活用の原点ともいえる旧松尾村時代は、高度経済成長を背景に村発展の構想を打ち建てられた。それは、農業、鉱工業、観光の三つをミックスした総合開発、いわゆる農鉱観一体の村づくりであった。

松尾鉱山に勤務した経験を持つ沼田宗一村長は、農鉱観一体の村づくりを主軸として強力に推進するとともに、松尾鉱山閉山後は、農業、地熱発電、観光の一体となった村づくりに精力を傾け、リーダーシップを発揮した。

「思い出のままに」 沼田宗一 より（抜粋）

今から丁度 55 年前、大正 11 年当時の村立松野小学校の高等科を卒業した後、一年間母のもとで人間としての在り方を躰られ、翌 12 年 4 月、松尾鉱山に就職した。

当時は硫黄を精錬し、馬車で屋敷台まで運搬していたものを、鉄索で運搬することになり、その建設の準備に取りかかった年であった。

初代社長（中村房次郎）さんのことで思い出すことは、大正 13 年だったと思うが社長さんが来山された時、あいにく雨降りので靴が泥で汚れておりました。気が利いたつもりでしかも社長さんの靴を磨くので紙も良いものを使わなければいけないと思い、新しい新聞紙を使って靴の泥を取っていたら、頭の上で、「君、君」と呼ぶ声がしたので顔をあげると社長さんが立っていた。「その新聞紙はまだ新しい紙だよ。泥をとったり汚れたものをふいたりするのには一度、二度使った古い新聞紙でやるんだよ」というご注意を戴き、偉い人でもやっぱり靴は新しい紙を使うものではないなと思うと同時に就職の時、色々と注意してくれた母を思い出し、母にすまないと思ったことがある。

この事が自分の生活の在り方について教訓となり、その後、物を無駄にしないですべて合理的にということが無意識のうちに行動に表れるようにと特に心がけ今日まで過ごしてきている。

鉱山が繁栄した時代、又重油から脱硫回収硫黄が生産されたことによって一年一年と下降線をたどった時代等を通じ身にしみていることは、なんととっても雪との闘いであり、又閉山近い時の鉱山の人達に対する村としての対策で、日夜ひとりで悩み苦しんだ日々のことである。

あれ、これと思い起こしても、すべてが鉱山住宅の焼却の時、とめどなく頬を流れる涙をふくこともなく、一人しょんぼり立ちつくして空に消えて行く煙を見あげていた自分の姿を思い出したところで追憶も霧散して行った。

参考資料：旧松尾村「松尾村誌」2019 年

松川温泉の由来

平安中期の武将安倍貞任の家臣、伊藤某が 1062 年(平安時代)このお湯を発見し、その末裔の高橋与次郎が 1743 年(徳川吉宗の時代)に開湯したのが始まりと伝えられます。

美しい松川溪谷の山間にひっそりたたずむ静かで素朴な温泉で、しかも白濁の源泉かけ流しの豊富なお湯で松川温泉の中では一番古い宿です。緑あふれる周囲とは全く別の荒涼とした風景が広がります。



伝えられている「松楓荘」の歴史

松楓荘としたのは、昭和 22~23 年頃だと思います。今の建物がそのあたりに出来たものです。与助の湯は 4 代目、昭和 23 年(1948)で、私はその 10 代目になります。かつての記録や資料(通い帳)は蔵にあったらしいですが処分され、今はありません。

葛巻のお客さんは、布団や米を背負ってきて、寄木のどこかに泊まったというんです。それでここまで二日ばかり歩いて来て、湯治していたんです。今考えると、温泉にきて湯治するというのは、よほど裕福というか、余裕のある人じゃなきゃ来れなかったのではないかと思います。

地熱発電所とそのころの暮らし

地熱発電所は鉾山が駄目になる、ちょうど 1965(昭和 40)年に完成して、
松尾鉾山と発電開始とが入れ替わっていったんです

発電所は良いことはあっても、悪いことはなかったと思います。第一に、発電所建設当時、1963(昭和 38)年か、1965(昭和 39)年ごろの道路の改良ですね。そのころ、木材を下すためのトラックですが、そのトラックで 40トンのトランスを 10km 足らずのところを運搬するのに一週間もかかったんです。カーブには全部鉄板を敷いて、それから下の方では橋とかなんかを全部補強して、運んだんです。

道路ができて暮らしも変わりました。当時は年末年始がせいぜいで楽しみが無かった。花札をやったり、麻雀をやる程度でした。電気もないですから、川(水門)を止めての水力の自家発電だったんです。電気はランプでした。

暖房は薪でやって、その後、木炭でもやりました。薪は毎年営林署からの払い下げで、その立木を切って使いました。炭焼きは、うちでは明治のころから大掛かりにやっていました。木炭は東京に送っていたようです。今の森の大橋のところ、あそこにスキー場ができたんです。その斜面の一体で炭焼きをやっていたそうです。炭窯は 30 かいくらあったんです。それを花輪線まで出して、東京まで送ったそうです。炭焼きは終戦後に止めたんじゃないかと思います。

次の世代に伝えていきたいこと

寄木の実家からここまでの道は江戸時代から使われている 1m~2m 程度の登山道路ぐらいの狭い道だった。父母はずっとここにいましたから、子供の頃はその道を歩いて毎週のように親類の子どもたちと遊びに来ていました。逆行するかもしれないけども、かつて子どもたちと一緒に歩いて来た、そういうことが懐かしいなと思えます。でっかいガマガエルがいたり、蛇がいたり、今考えると、楽しかったなあと。今、その道は私でなければ分かりません。あの頃の道路は江戸時代から歩いている道路で、足触りがすごくいいんです。いまの登山道よりもずっと良いですから、雨が降っても当時の道路っていうのは、側溝を掘っているわけでもないのに、排水も良く、いいところを歩いている。

そういう意味では懐かしいなと思う。

確かに、便利になって電気はあるし不自由することもない、テレビは見れるし。また古い温泉(湯治場)でも開くかなと思ったり、それもいいかなということを考えたりもします。

語り手: 高橋 晟氏(松川温泉(株)代表取締役)

2. 旧松尾村時代の産業等の変遷

2.1 旧松尾村時代の産業等のあらまし

2.1.1 概況

かつて奥羽地方の開発は、平安の初期のころ（西暦 800 年ごろ）からとみられる。当時、和賀、稗貫、斯波（紫波）の 3 つの郡が置かれて、今の盛岡地方を中心としたこれらの地域に、大陸や朝鮮半島からの帰化人が多く移りすんで、開拓の仕事に従事していたであろうといわれている（岩手郡誌による）。

奥州は古くから金産国であり、陸奥の長者には金の山師が多いといわれた。そうした地理的な環境下において、旧松尾村の産業は、農に始まり、鉱が入り組んで発達していく。江戸時代にははっきりとした石高も調査されているが、しばしば凶作、飢饉、冷害、風水害に悩まされながらも、米と稗、麦、大豆を中心とした農業が徐々に確立されていった。一方、鉱業は 1914（大正 3）年 8 月 1 日、硫黄の松尾鉱山が登場し、太平洋戦争の戦中戦後を通じて、松尾村の主要産業として、村の発展に大いに貢献した。

鉱山の隆盛に呼応して農業も近代化へ拍車をかけた。明治、大正、昭和初期にかけて主として耕地整理などで農業環境の整備を果たし、太平洋戦争の終戦後は、農地改革による自作農創設、盛り上がった機械化ブームで画期的な技術革新、営農改革が実現した。これに加えて、1955（昭和 30）年以降は、八幡平が国立公園に編入されるに及んで、八幡平を中心とした観光が脚光を浴びていく。

30 年代後半から 40 年代前半にかけて、「農、鉱、観」の三本立て行政が叫ばれ、一時代を築いていった。ところが、1969（昭和 44）年 11 月、脱硫硫黄に駆逐されるヤマ硫黄の悲劇をモロにかぶって、松尾鉱山の倒産を招くこととなり、主要産業の「鉱」は姿を消した。するとそれと入れ替わるように、八幡平電機、住宅工業、それに、第一化学などの誘致工場が登場して、「農、工、観」の新しい産業形態がつくられていった。

2.1.2 地域課題の包括的解決という示唆

農に始まり、鉱が入り組んで発達し、農・工・観に活路見いだす

旧松尾村時代の政策は、現代における暮らしと産業のあり方という面でも、その地域課題を包括的に解決していくという点で示唆を与えてくれる。それは、「農、鉱、観」の三本立て行政であり、「農、工、観」の新しい産業形態の創造である。

また、この「農、工、観」の創造は、地熱をエネルギーとしてだけみることなく、農業振興や温泉郷開発という多様な利活用につながっており、「地熱発電のふるさと」と言われるような八幡平市の暮らしと文化の礎になっていることが重要である。

2.2 農業・鉱業・地熱・観光の連携による発展

2.2.1 農業 – 厳しい自然の克服

(1) 土地制度改革を基盤にした農業の近代化

太平洋戦争の戦中、戦後を通じて国民は極端な食糧不足と労力不足に悩まされた。そうした中で、わが国の狭い国土を効率的に活用するにはどうしたらよいかが討議され、その結果、編み出されたのが1949（昭和24）年に公布施行された土地改良法である。

戦後の農地改革によって開拓入植が推進されたが、1954（昭和29）年に前森山地区に入植した410ヘクタール、40戸が大きい。この前森山開拓地の人たちは中国から引き揚げてきた人たちで、農林省からの特別指定による入植で、全国でも珍しい集団農場方式（コルホーズ）の経営で成功を収めている。

稲作においては、めざましい改良の跡が見られた。大正時代からの耕地整理や昭和に入ってから金肥、つまり化学肥料の出回り、農機具の導入、例えば顕著なもので田起こしの三本鍬から馬耕用機械、足踏み脱穀機などが普及するに及んで、農作業のスタイルもかなり近代化されていった。しかし、目を見張るような進歩を見せたのは戦後である。かつて終戦直後、わずか200haだった水田は、30年代の米のブームによって、当時、1,305ha（約6倍強）にふくれ上がっている。

一方、畑作の換金作物は、終戦直前直後までは、ヒエ、麦、大豆の二年三毛作主体の栽培法を行ってきたが、1960（昭和35）年の芳香カボチャの導入を初めとして、多様化の道を走り出した。

(2) 松川土地改良区の沿革と事業

1) 松川土地改良区の設立

松川土地改良区は、岩手県の北西部に位置し、南部には岩手山、西部には奥羽山脈が縦走し、国立公園八幡平を流域として流れ出る松川を主流に、八幡平市の約3,737haを潤す水田地帯で通称西根盆地と呼称されている。松川を水源とする水田耕地の開発が始められたのは、およそ400年前といわれている。最初に後藤川堰、そして、根別堰が1674（延宝2）年後、袖川堰が1751（宝暦元）年後にそれぞれ開墾されたと推測されている。また、藩政時代は普請係、肝入、あるいは代官が采配し、一雨毎に河床が変わる松川をせき止め、非常な困難を克服して取水したともいわれる。

1949（昭和 24）年8月 3 日、土地改良法が制定公布されるのを機に松川に水源を求めている当時の松尾村、平館村、田頭村、大更村の有志により、土地改良区設立協議会が開催された。当時、県営の後藤川用排水改良事業が採択されたことから土地改良法に基づき、後藤川土地改良区を設立（昭和 26）して事業を実施することが確認された。1953（昭和 28）年 2 月 19 日、土地改良事業の施行地域が拡大されたのを機に、現在の松川土地改良区と称することになった。



写真 3-2-1 土地改良事業

2) 県営土地改良事業

松川の流域は岩手県を主峰とし、黒倉山、三ツ石を経て八幡平に至る、いわゆる裏岩手の連邦に囲まれているため、夏季にまで及ぶ融雪の影響によってその水温は極めて低く水稲に著しい冷水害を与えていた。また取水施設も自然取水、木工沈床等の古い形で、たびたび流出し多額の管理費を要していた。そのため、県営用排水改良事業松川地区として申請、水路改修を含めた受益面積約 2,000ha が、1962（昭和 37）年に採択され、頭首工、及び温水路も含めた大規模な水路改修が 1978（昭和 53）年まで実施された。また農地造成事業として第二松川地区開拓パイロット事業が 1966（昭和 41）年から 1970（昭和 45）年にかけて実施され、高石野、盲平、中沢地区に 284ha の水田及び草地在り造成された。

県営ほ場整備事業は 1970（昭和 45）年度から着手し、耕地の大型ほ場整備により農地の集団化、導水路網の整備統合を行うとともに、大型機械を導入して営農の省力化と生産基盤の強化を目的として、松川地区（710ha）、第二松川地区（584 ha）、松尾地区（244 ha）、松川第三地区（374 ha）の 4 地区が実施され、1992（平成 4）年までにそれぞれ完了している。

これら二つの大規模な県営事業は、地域の農業近代化に貢献したと同時に、ひいては農業全体の発展、農家の生活向上に果たした力は大きなものがある。

■村報まつお 第171号 昭和40年3月1日

松川用排水県営事業

1,700ヘクタールうるおす松川用排水県営事業について、旧松尾村分では40年から着工している。これは、松川用排水県営事業というのが正式の名称で、松尾、西根両町村にまたがるおよそ10億円の大工事であった。この工事が完成すると、全体で2,209トン（1726石）の増収が見込まれていた。その事業目的の一つに冷水の解消があった。そんなころ、松尾、西根地域で田植えをする場合水温は、摂氏12度～13度といわれ、標準の17、18度をはるかに下回っていた。これを防ぐために温水路を3カ所に設ける計画だった。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第171号」1965年

広報まつお
昭和40年 3月1日
No. 171 発行 岩手県岩手郡 松尾村役場 (毎月2回発行)

▲3月
1日(月) 国土緑化運動強調期間(5月31日まで) 家族計画普及運動(31日まで) 所得税の確定申告、青色申告(16日まで) 固定資産税課税台帳の縦覧(20日まで)
3日(水) ひなまつり 耳の日
6日(土) 皇后誕生日
7日(日) 消防記念日 建築物防災指導週間(31日まで)
8日(月) 国際婦人の日
14日(日) 青年演劇発表会(後1時・松尾中)

卒業期にあるこどもの指導(3月中)

1,700ヘクタールうるおす松川用排水県営事業

▲「松川の県営事業」というのははじまります。これは、「松川用排水県営事業」というのが正式の名称で、松尾、西根両町村にまたがるおよそ10億円の大工事です。
▲この工事が完成すると、全体で2,209ト(1千726石)の増収が実現します。

温水路などで増収
松尾分は40年から着工

冷水田の解消が目的
こんどの事業の目的は四つあります。
第一は、冷水の解消です。現在、松尾、西根地域で田植えをする場合水温は、摂氏十二度～十三度といわれ、標準の十七、八度をはるかに下回っています。これをふせぐために温水路を三カ所に設けます。金沢から刈屋を経て、鹿野付近に至るまで延べ三千八百呎におよぶ温水路三カ所を新設し、幅二十呎を水深四十三センチで流し、日光で温めます。
第二は、これまで数カ所に散在している取水施設を金沢のかみ手の新二頭首工の二カ所に集約して取水の合理化をねらいます。
三番目は、曲がりくねっている現在の水路の底辺と両側面をコンクリートで舗装し、流れを直線にし、またろう水をなくします。新後藤川(一万三千八百三呎)根別(七千四百十呎)袖川(七千六百八十四呎)平笠(三千二百五十呎)の四つの幹水路、合わせて三万一千八百四十七呎の改修を行います。
四番目は、それぞれの地域の水田への分水を適切にやるための分水装置を設けます。フランスの特許を持つネルビック型分水装置という精巧な機械を各地域の水路の分岐点

トッパンは松川用排水県営事業の概要図

図 3-2-1 松川用排水県営事業

出典：旧松尾村「広報まつお第171号」1965年

(3) 新農業構造改善事業、熱水ハウス

1984（昭和 59）年 1 月 10 日、旧松尾村の農業にとって劇的な新しいページが開かれた。この日、高石野と上寄木の熱水ハウス団地に、1966（昭和 41）年 10 月完成、操業を始めた松川地熱発電所から 60℃のお湯が流れついた。真冬の雪の中でも野菜や花が生産できるという、通称「熱水ハウス」の登場であり、岩手県で初めて日の目を見ることになった。

新農耕、正確には新農業構造改善事業という。熱水ハウス栽培はこの事業のうちの一つであった。1981（昭和 56）年から始まった新農業構造改善事業の「高冷地野菜」、「果樹」部門とともに組み込まれた「施設野菜」の栽培がそれである。畑地区の高石野施設野菜生産組合と上寄木地区の上寄木施設野菜生産組合が事業母体である。高石野団地は 10 戸で 50 棟、上寄木団地は 7 戸で 45 棟、それぞれ栽培に取り組んでいる。



写真 3-2-2 熱水ハウス栽培

真冬でも引湯のお陰でハウス内は 25℃から 30℃の気温を保ち、花木類やイチゴのほか、ピーマン、キュウリ、ミツバなどの野菜を生産している。冬場にも花や果物、野菜を生産、周年出荷ができる利点をフルに生かして、これからの農業のあり方を示唆して県の内外から注目されていた。



図 3-2-2 第二松川開発事業、待望のお湯
出典：旧松尾村「広報まつお第 331 号」1971 年

(4) 畜産・酪農 一馬から牛への歴史

松尾村の畜産は、大別するといにしへの馬産と、近代の酪農の二つに分けられる。その流れは、そのまま封建社会から近代社会への時代の推移そのものだった。

昔の南部の里に馬が栄えたことは、一つには農耕からの必要性によるものがある。馬は歴然として畜産の柱であった。また、南部馬として全国にその名をほしいままにした馬産については、旧藩当時からいろいろの制度を定めて奨励されてきたようである。このように、初めは農耕用だった馬の存在価値は、旧藩時代には“馬産”そのものがお金に結びつく魅力となって、いよいよ盛んになっていった。ちなみに1859（安政6）年の飼養頭数を、村内分だけでみると、松尾村104戸、228頭、野田村92戸、260頭、寄木村79戸、268頭であり、このことから平均3頭以上の飼育であった。

明治維新以後は、軍馬の必要性が、一段と馬産をあおり立てていった。農家にとっては、農耕の需要と現金収入を得るために、欠くことのできない産業に成長していった。

このような有利この上ない馬産も、日本の敗戦とともに、そこはかとなく姿を消すことになる。加えて、農業経営の近代化に伴って農耕馬としての必要性も、あっという間に消えていった。それは馬車に代わるトラック、蒸気機関車に代わるディーゼルや電化と同じような運営をたどった。減っていった馬に取って代わったのは牛である。それも初めは、農耕用として、田植時の荒かき、代かきにいくらか見掛けた一時期もあったが、やがて、昭和30年代に入って耕運機が登場し、40年代に入るとトラクターなどが脚光を浴びてきて、役牛としての役割は終わりを告げる。

このような農業経営の近代化と、これにクロスするように、乳牛が、さっそうとスポットライトに照らし出されて登場する。1948（昭和23）年に初めてホルスタインが導入されて、酪農の草分け時代を経過した畜産行政は、とくに、30年代に入って酪農の定着化、あるいは前進への姿勢が読み取れるようになった。

農業経営自立促進対策を基本路線に、1957（昭和32）年4月にはジャージー牛33頭が導入され、ホルスタイン種の導入も積極的に進められ、1964（昭和39）年10月には1,000頭、1970（昭和45）年にはついに2,000頭を突破した。



馬は農耕用でスタート、後軍馬で繁栄を見せたが、戦後は牛に代わられた



乳牛の激増に牧野造成も大いにピッチ上がる（大花森牧野）



酪農は年を追って村の産業の主軸を占めていった

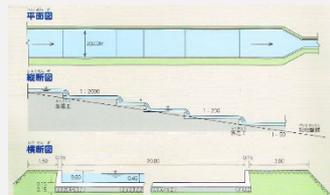
写真 3-2-3 馬から牛への歴史

温水路によって水の温度が約 2.7℃上昇

田んぼの水温は 32℃前後が適温とされており、17℃以下になると成長が悪くなると言われています。田植えから稲刈りまでの期間、松川の水温は 9℃～20℃と低く、水温を上げる方法として温水路を作ることになりました。温水路とは、太陽の光と空気の熱を水に吸収させて水温を高くするもので、面積をできるだけ広くし、水の流れを遅くすることが重要なポイントになります。

ここでは水路の幅を 20m、水路を 2,000mで 1m下がる勾配にして多くの落差工(人口の滝)を作りました。この落差工では水の落下によって泡が出来ることにより空気との接触がそれだけ増えて、水温の上昇を手助けしています。

松川温水路(第一・第二)では約 2.7℃の温度が上がっており、その熱源を太陽ではなく電力を使用すると電気料金だけで年間 1,800 万円かかる計算



温水路を活用したふれあい学習会

私たちの方では毎年、ふれあい学習会というものをやっています。この子どもたち向けのパンフレットの中で、温水路についてまとめています。この学習会は、松川土地改良区が単独でやっているわけではなくて、岩手山麓土地改良区、雫石町と連携してやっています。そして、今年は松川土地改良区、来年は雫石町などの持ち回りで開催しています。近隣市町からの参加者が大多数ですが、県外からの参加では、夏休み期間中ですので子供会の行事として団体で参加される方々もいました。

学習会の案内ガイド、説明などは土地改良区の職員が担っています。水辺の活動でもあり、安全管理上、対応できる人数には制約があります。例えば、ニジマスのつかみ取りなど、運営側がパンクしてしまいます。これまでに学習会を 13 回開催しています。多い時で 300 人ぐらい参加者がありましたが、200 人ぐらいが適正で規模はないかと考えています。

維持管理上の課題

景観が良いとかいいますが、農家の皆さんの負担があつての資源

かつて、昭和 40 年頃は馬、人力で田んぼを耕し、米をつくっていました。この当時は 6 月下旬ごろに田植えをしていました。今は 5 月ですけれども。

この間に米の品種改良が進んで北海道でも特 A の米が穫れるようになりました。今、うちの官内でも兼業農家の方が多いです。その農家は土日集中して田植えをします。だから、水の温度が低いから田植えをしないと、天候が良いから田植えしようとか、それは関係なく、土日に田植えをしています。温水路は当時の発想ですが、実際、いまは水温に耐えられる米の品種改良がなされており、水温が低くとも米はつくれます。

それから、県で温水路の改修工事もしていますが、それらを含めた温水路の維持管理費は小さくありません。また、温水路周辺の草刈などの維持管理(億単位の経費)が必要で、農家の負担もかなり大きくなっています。

見学者などは珍しい温水路だとか、景観が良いとかいいますが、農家の皆さんの負担があつての資源だという理解が大切です。

語り手:藤原 正浩氏(松川土地改良区工務課長)

2.2.2 鉱業 -村財政への貢献抜群

(1) 松尾鉱山の開発・その前後

松尾鉱山の開発は、1882（明治15）年の秋、松尾の佐々木和七氏が寄木第二地割字畑92番地の山地内で硫黄の大露頭を発見したことに始まる。当時は、硫黄の使い道があまり無かったことや、この付近は熊の住む原始林で容易に人間の近寄り難い地域であったことなどから、開発が遅れたものと思われていた（「松尾鉱山史」から）。

その後は、採掘されないまま、鉱業権は犬飼氏の手から転々と、何人かの間を譲り渡されて、1911（明治44）年7月、岩手鉱山鉱業組合が、横浜市の合名会社、増田屋に応援を求めることになる。増田屋は貿易商社で、当時、なかなかの羽振りを誇っており、松尾鉱山は名実ともに本格的な採掘を始めることになった。

1914（大正3）年、8月1日、松尾鉱業株式会社が創立され、増田屋社長、増田喜兵衛の二男、中村房次郎氏が社長に就任し、経営にたずさわることになった。

(2) 順風満帆、大正時代の前半

増田屋の手でスタートした松尾鉱業は、開発に対して積極的に取り組むようになり、鉱山経営にとって、初歩的段階の設備が次々と整えられていった。1915（大正4）年4月には、まず元山、屋敷台を結ぶ馬車道路と、鉱石を運ぶ索道の建設に着手した。この索道を動かすために必要な電力は、赤川の流れを利用した水力による自家発電であったが、故障が続出し、運転に苦労した。しかしこの電気はヤマの人たちの日常生活にも利用されたため、それまで石油ランプに頼っていたヤマの人たちの日常生活は、まるで文明の夜明けを迎えたような電灯のある暮らしは住民にも喜ばれたとされる。

また同じ1915（大正4）年には、屋敷台と寄木新田間の軽便鉄道、約7キロメートルが完成した。ところが、荷馬車輸送は非効率であったため、その合理化対策として、軌道を延長することにし、1916（大正5）に完成させた。

そのころ、西根五力村（大更、田頭、平館、寺田、松尾旧五力村）の住民の間から、平館一好摩間にぜひ軽便鉄道が欲しいという強い要望がわき起こった。そこで、1917（大正6）年7月、有志、諸団体を募って、「岩北軌道株式会社」を設立し、平館一好摩間の軽便鉄道を創設した。この会社の出資金の三分の二は松尾鉱業が負担した。この軽便鉄道は、お客さんも乗せれば、貨物も取り扱ったために、この地域の人たちから感謝された。またこの軽便鉄道は、後年、国鉄花輪線の敷設誘致の促進にも役立った。

ちなみに、国鉄花輪線の第一期工事は1922（大正11）年に完成したが、その路線は、この軽便鉄道と平行して設けられた。そして、花輪線が営業運転を始めたことによって、平館一好摩間の軽便鉄道はその任務を終えて廃止された。

(3) 金融恐慌での試練、昭和初期の繁栄

大正も後半を迎えた 1920（大正 9）年、わが国は全国的な金融恐慌に襲われ、やがて松尾鉱業の親会社である増田屋にも、少なからず影響を及ぼした。倒産寸前にまで追い込まれ、当然のように子会社である松尾鉱業にもその影響は及んで、その切り抜け策を協議した結果、全従業員 651 人のうち、278 人の解雇を決定した。また、徹底した経費の節減と生産コストの引き下げの実施などで、事業の継続が可能になり、このトンネル時代をくぐり抜けることに成功した。

大正時代の荒波を見事泳ぎきった松尾鉱業の経営は、さまざまな曲折を経た末、逐次好転していった。1934（昭和 9）年 3 月、松尾鉱山鉄道が敷設されて、蒸気機関車で客、貨車を運行する近代的な装いに衣替えした。また山内の敷設も一つ一つ充実完備していった。1935（昭和 10）5 月には、屋敷台一元山間を定期バスが走るようになった。もちろん、松尾鉱業の会社直営である。松尾鉱業の社運は盛んになり、やがて硫黄のヤマとして、世界の檜舞台に乗り込んでいくことになった。



写真 3-2-4 硫黄鉱床の掘削



図 3-2-3 鉱石を積んで屋敷台から大更へと列車は走る

出典：旧松尾村「心に生きるふるさと 松尾の鉱山」1980 年

(4) 戦後は従業員の福利充実

終戦を迎えた、1945（昭和 20）8 月 15 日以来、日を追って、従業員も復員し、再びヤマは元の活況を呈するようになった。戦時中の戦力増強のための“増産体制”から一転して、従業員一人一人の生活力向上のための増産に切り替わった。労働組合も組織されて、会社に対して、従業員の待遇改善、環境の整備を要求した。このため、従業員の福利厚生にはわかに充実していった。11 棟を数えたアパートや独身寮の建設などの住宅施設の整備、松尾鉱山病院、屋敷台分院の建設など医療施設の充実、そして、松尾鉱山中学校など、当時としては珍しい鉄筋コンクリート建ての校舎の建設をはじめ教育施設の完備、といった積極的な対策は、他地域の人たちの垂ぜんの的でもあった。

このあと 1953（昭和 28）ごろまでは、松尾鉱山にとっては文字通り、栄耀栄華をほしいままにし、“硫黄王国松尾”を誇った歴史的な点景でもあった。

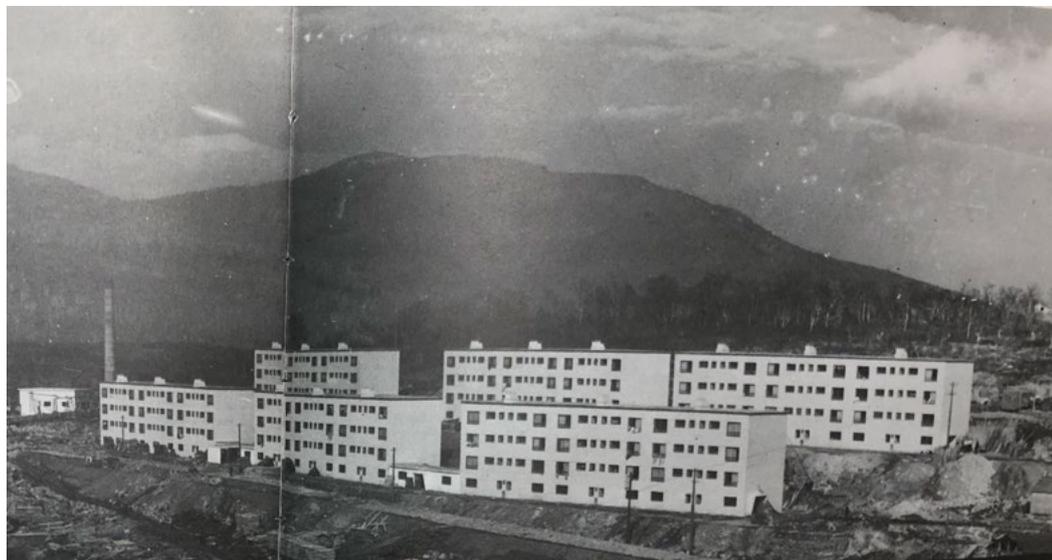


図 3-2-4 緑ヶ丘に 144 戸 1951(昭和 26)年 10 月 25 日竣工
出典：旧松尾村「心に生きるふるさと 松尾の鉱山」1980 年

(5) 巨額の負債がかえ、ひっそりと終焉

だが、松尾鉱山の栄華は長くは続かなかった。1958（昭和 33）年 4 月、初めての企業合理化が行われた。化繊業界の操業短縮などによる余波で、308 人が希望退職でヤマを降りた。次いで、1962（昭和 37）年 10 月には、貿易の自由化に対するコストの引き下げ策を講じたものの成果を見ずに終わった。再び希望退職を募って、1,812 人が離山していった。三度目は 1967（昭和 42）年の合理化で、884 人が住みなれたヤマを後に、村を離れた人たちも数多くいた。

そしてついに、1969（昭和 44）年 1 月 16 日、会社更生法の適用を受けて、管財人として群馬県万座硫黄株式会社社長浅田寛二氏（72 歳）鋭意、再建に努力したが、事業を継続することはかなわなかった。この年 11 月 11 日、最高時は約 4,000 人も従業員を擁して「東洋一の硫黄鉱山」を誇った松尾鉱山も、全員解雇という悲惨な幕切れを迎えることになった。解雇された従業員の大半は全国に職場を求めて散った。

その後の松尾鉱業株式会社は、約 80 人を再雇用して、硫化鉱の生産を細々と続けてきたが、再び上昇気流に乗ることのないまま昭和 49 年 5 月 30 日名実とも姿を消し、ひっそりと終焉を迎えた。

■村報まつお 第134号 昭和38年3月1日

鉱業危機突破村民大会ひらく

鉱山の不況は村の危機

村民ぐるみで松尾鉱山を守る運動展開

昨年10月、企業の合理化によって、1082人の希望退職者を出した松尾鉱業株式会社(社長小島岩太郎氏)は、その後の再建に全力をあげていますが、3年後の貿易自由化をひかえているだけに、その見通しもなかなかきびしいようです。

ところで、本村にとって松尾鉱業所の好、不況は、村財政のバロメーターとまでいわれてきました。つまり、「松尾鉱山の危機は松尾村の危機」でもあるわけです。そこで直面している松尾鉱山の危機を、全村民が一体となって打ち破ろうという趣旨から、2月26日、鉱業危機突破村民大会をひらき、松尾鉱山再建へのはげしいファイトを盛り上げました。

…かくして大会は正午すぎ盛会のうちに幕をおろしましたが、決議文は3月4日、5日東京で開かれる全国大会に提出し強く訴えます。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第134号」1963年



図 3-2-5 鉱業危機突破村民大会ひらく
出典：旧松尾村「広報まつお第134号」1963年

(6)「松尾鉱山」をこよなく愛した、二人のリーダー

松尾鉱山株式会社の誕生

中村房次郎（初代社長）とその時代

中村房次郎は、明治3年10月7日、増田嘉兵衛の二男として横浜市老松町に生まれた。父・嘉兵衛は開港以来の横浜商人として多くの試練をくぐりぬけ、独自の分野を開拓した一人であった。増田屋嘉兵衛商店として出発した増田屋は、石油、砂糖、海産物、生糸、煙草、その他実に多くの商品を扱い、明治39年には貿易部門が独立して増田合名会社が設けられ、長男の増蔵と二男の房次郎が代表社員になった。この間、日豪貿易の先駆者としてオーストラリアへの進出を企て、羽二重の輸出、牛脂の輸入を行ったが、この貿易にわが松尾鉱山の硫黄も参加することになるのである。



初代社長中村房次郎

写真 3-2-5 中村房次郎（初代社長）

房次郎は明治16年2月、父の旧主榎並屋中村初太郎家の養子となって中村姓を名のり、26年5月、横浜切っでの豪商初代茂木惣兵衛の養女あいと結婚した。

房次郎は徹頭徹尾、事業の人であった。彼にとって事業こそ生命そのものであった。第一次大戦前は増田屋を統率し、大正9年の世界大恐慌から再起した後は、松尾鉱山の開発に全身全霊を打ち込んだ。

中村正雄（第二代社長）

松尾理想郷の実現へむかって 山の文化の灯をともし

長男長太郎は病弱（昭和22年55歳で長逝）であったため、次男正雄（原富太郎の一子良三郎と同期の早稲田大学卒業）が、松尾鉱山の社長に就任し父の遺業を継ぎ、すぐれた経営者ぶりを発揮した。旧松尾鉱山の一角には今もなお、横浜生まれの里見弴の筆になる「誠実の人中村正雄」の石碑が残されている。



二代社長中村正雄

写真 3-2-6 中村正雄（第二代社長）

社長はこの山をこよなく愛し、この山で生活することに無上の喜びと満足とを感じておられた人であった。社長に就任されて以来の滞在記録を調べると、昭和18年は10月から12月の三カ月間に32日、19年は163日、20年は151日、21年は143日、22年は173日、23年は117日、24年は216日、25年は286日、26年は2月13日から下山された22日までの10日間となっている。

参考資料：旧松尾村「心に生きるふるさと 松尾の鉱山」1980年

「近代化産業遺産」を伝える

松尾鉱山資料館は、1981(昭和 56)年に旧松尾村民俗資料館として開館し、2014(平成 26)年 4 月から現在の「八幡平市松尾鉱山資料館」に名称を改めました。かつて「雲上の樂園」と呼ばれ、東洋一の硫黄鉱山としてその名を馳せ、1969(昭和 44)年に閉山した松尾鉱山に関する資料を展示しています。

松尾鉱山露天掘跡地は経済産業省から「地域活性化に役立つ近代化産業遺産」に、当館の所蔵資料は産業考古学会から「推薦産業遺産」に認定されています。



「雲上の樂園」と言われた近代的な街

今でも当時を偲ぶ鉱山出身者やその孫世代の方々が当資料館に数多く訪れています

旧松尾村の財政の約 9 割は松尾鉱山からの収入だったと言われています

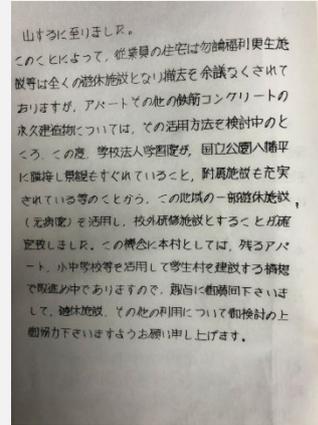
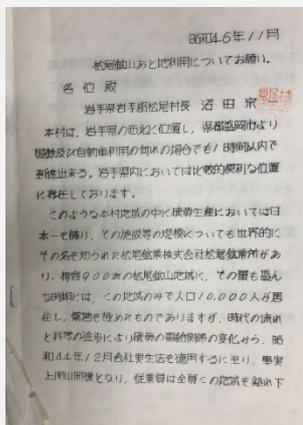
今では廃墟となったアパートが残る緑ヶ丘には、半年間は雪に覆われる厳しい環境にも関わらず、かつて 1 万 4 千人を超える人々が暮らす「雲上の樂園」と言われた近代的な街がありました。操業から間もない 1917(大正 6)年には小学校が開校し、従業員のためにビリヤード場やテニスコートを作り、広い荷造場では定期的に活動写真を上映していました。従業員たちの収入は、一般サラリーマンの 2 倍以上、昭和 20 年代後半からは、水洗トイレ、セントラルヒーティングが完備された鉄筋コンクリート 4 階建てのアパート 11 棟、2 つの映画館、中学校や病院が新築され、購買部では、東京本社から送られる新商品をいち早く購入できました。

繁栄を誇った松尾鉱業株式会社は、やがて貿易自由化により海外から安い硫黄が輸入されはじめ、大気汚染をきっかけとして石油燃料精製時に取り除かれた精製硫黄が市場に出回るようになると、経営は厳しさを増し、露天掘りの採用、精錬工場の新設や会社の分業化などの経営努力も身を結ばず、1969(昭和 44)年 11 月に事実上の閉山、1972(昭和 47)年に正式に鉱業権放棄するに至りました。

このような中でも希望退職者には、職業安定所や関連企業と連携して再就職を斡旋し、家族として過ごしてきた職員が路頭に迷うことがないように出来る限りの援護を行ったこともあり、今でも当時を偲ぶ鉱山出身者やその孫世代の方々が当資料館に数多く訪れています。

松尾鉱山の跡地利用

松尾鉱山が事実上の倒産をしてから 2 年後の昭和 46 年(1971)になって、この鉱山跡地をどのように活用するかが、ようやく議論されました。この年の 5 月になって、学習院から旧鉱山地内にセカンド・スクール、つまり第 2 校舎、野外教室を建てたい、ついては残っている建物のどれかを貸して欲しいという申し入れがありました。



語り手: 高橋 朗(松尾鉱山資料館・管理指導員)

2.2.3 地熱開発 - 苦節 12 年、日本初の偉業

(1) 蒸気で電気…冷笑の出発点

今でこそ、「松川地熱発電所」は、わが国で初めて、世界でもイタリア、ニュージーランド、アメリカに次いで 4 番目の“地熱発電所”として知られている。そして、旧松尾村にとっても八幡平温泉郷にお湯を供給し、村財政の源と評価されていた。だが、50 年余り前に、だれがこの地熱発電の行く末を予測し得たであろうか。“地熱発電”を過去の資料から時系列的にひもといてみることは、極めて意義深いものと思われる。

時代は、一気に 1954（昭和 29）年にさかのぼる。この時代は、終戦の混乱状態もようやく落ち着きを取り戻し、庶民の生活もいくらか安定のきざしを見せ始めてきたところである。当然のように、住民福祉という言葉で代表される福祉行政の必要性が、痛切な叫びとして巷に流れるようになっていた。旧松尾村は、古くから松川温泉があって、この地の開発を進めて村民の保養の場にしようという世論も高まっていた。

そんな中であって、村では、1955（昭和 30）年を迎えて、将来、観光の需要がますます増大することを、いち早く予測していた。その手始めとして、松川温泉地域に、村民を対象とした保養所の建設を計画し、早速、温泉開発に手を染めた。7 本のボーリングが松川地域一帯に打ち込まれた。このうちの 4 本からはお湯、つまり温泉がわき出たものの、残り 3 本は、良質の蒸気の噴出にとどまったことから、「なんだ、蒸気では役に立たん」ということで、すぐに埋め戻されたというエピソードも作られた。

ところが、この年、初めて村長のイスに着いたばかりの沼田宗一氏は、松尾鉱業所時代電気関係の仕事にたずさわってきた人だけに、「蒸気で電気を起こすという話を聞いたことがあるが…」と、ひらめいたというのである。早速議会にこの話を持ち出したところ、「蒸気で電気などと、とんでもない」と冷笑される一コマもついたという話も残されている。

しかし、4 本のボーリングから出る良質の温泉は、1956（昭和 31）年、村営保養所狭雲荘（現在の狭雲荘）として、開業に漕ぎ着けた。しかし、電気が無いため、夜はランプ照明を余儀なくされた。もし、蒸気による発電が実現するなら、一石二鳥ではないか、と早速、沼田村長は当時松尾鉱業所探査課長の馬淵正直氏に相談を持ち込んだ。

(2) 東北工との出会いで大前進

そのころ、通産省工業技術院地質調査所では、この地熱発電については研究中であるといった情報が流れてきた。村では間髪を入れずに、松川地域での研究調査を申し入れた。これを受けた地質調査所では直ちに地質調査課長の近藤信與氏を現地に派遣し、詳しく調査した。その結果蒸気は極めて良質で有望であること、国の調査費で、ぜひとも研究調査を実施したい旨をもらして、帰京した。その後、吉報が大いに待たれた。

ところが、折悪しく、地質調査所が 10 年来、別府や草津、鳴子などで研究を続けたものの、いずれも失敗に終わっていることから、大蔵省は、今後、研究を継続することは国費の無駄遣いである、と難色を示していた。このため、地質調査所としても、直営での研

究調査はあきらめざるを得ない、との連絡があった。代わって、東北電力に研究するように、と斡旋はしてくれたものの、東北電力でも別府での失敗の経緯を重く見て着手を渋っていた。そんな折も折、地質調査所主催の会議があって、東北工株式会社（現在の日本重化学工業株式会社）の富岡社長も出席していたが、その席上、近藤氏から松川地熱開発の話が聞かされた。熱心に耳傾けていた富岡社長は「そのお話、うちでやってみましょうか」という意向を示してくれた。

近藤氏から、沼田村長のもとへ連絡が飛び、沼田村長はすぐさま上京した。近藤氏は、「ある企業の社長が、ぜひやってみたくて言っている。名前を伏したまま会ってみてはどうか」と促した。ここに、富岡社長と近藤氏と沼田村長の三者会談が行われた。その結果、現地調査の結果が良ければ研究に着手することを、お互いに確認し合った。

まさに、この日、この時に会合を起点に、松川地熱発電所の開発は、以後、ドラマチックな展開をみせていくことになる。

(3) 一号井の噴気で自信深まる

1956（昭和 31）年 11 月、東北工の手で現地調査が行われた。そして、有望性が鮮やかに立証された。そして、それから間もない 12 月開かれた村議会で、これまでの経過の報告と、受け入れ態勢についての報告、および協議が行われた。その結果、受け入れを正式に決定した。

1957（昭和 32）年 4 月 20 日、村と東北工との間に「この事業の実施に当っては共存共栄の精神をもとに、友愛と誠意をもって事の処理に当たること」というような趣旨の協定書が交わされ、事業は直ちにスタートした。東北工では、早速松川地熱開発発事務所を開設した。当時、東北工の青年将校の異名をとった才腕の森芳太郎氏（後の日本重化学工業株式会社常務取締役、本社の地熱事業本部長）を先頭に、研究調査を進めた。そして、1958（昭和 33）年 5 月、通産省工業技術院地質調査所との共同研究契約を結んだ。さらに、電気探査など近代技術の粋を集めて調査研究に総力を挙げた結果、その有望性は年を追うごとに立証されていった。

1963（昭和 38）年に至って、新技術開発事業団との間に、「地熱発電用蒸気の生産技術」の委託契約が取り交わされたが、これによって、2 万 kW の発電は本決まりとなり、発電所建設事業にエンジンがかけられた。やがて、目を見張る世紀の一瞬は、1964（昭和 39）年 1 月 14 日の早朝に訪れた。本格的な発電用の第一号井が、深さ 945m で噴気し、その物すごいごう音とともに、待ちこがれた蒸気の柱は、激しい勢いで冬空高く噴き出した。この地熱開発が緒についてから実に 9 年、関係者の苦労はこの一瞬に吹っ飛んだ。手を取り、肩を抱き合うたくましい男たちは、あふれ出る涙を、堅いこぶしで荒々しく、無造作にぬぐい合っていた。

その後、二号井、三号井もそれぞれボーリングされていった。また発電所の設備工事も順調に進められた。

■村報まつお 第 158 号 昭和 39 年 8 月 15 日

おみごと、噴出の一瞬

ことしの1月14日に、第1号井からはじめての蒸気がふき出してから三カ月後、つまり4月の雪どけを待って、松川荘の裏手50メートルのところ、第二号井のボーリングをおろしました。

やがて、午後1時36分、はじめ、むくつむくつと灰色の盛り上がりを見せてふき出した蒸気は、間もなくごう音とともにすさまじい勢いでふき上げました。30メートルのヤグラの頂上を突き刺さるようなはげしきで吹き抜けていきました。

ヤグラのまわりの作業小屋で待ちかまえていた工事人夫たちの間からどっと、万歳の歓声がわき起こりました。その中で、工業技術院調査所の早川正巳博士が、だれかれを問わず、「よかった、よかった」と握手を求めて歩いている姿がとくに印象に残りました。この人は、この地熱開発をはじめたころから松川温泉に滞在して作業を指導してきた方で第一号井についての噴出が、涙の出るほどうれしいと感動していました。



参考資料：旧松尾村「広報まつお第158号」1964年

■村報まつお 第 170 号 昭和 40 年 2 月 15 日

出そろった蒸気3本 松川地熱

松川温泉地内でボーリング中の三本目の蒸気は、1月21日午前11時15分にふき出しました。こんども、前二本に劣らないA級の蒸気で、前の二本と合わせて、年内には2万KWの試験発電が、いよいよ実現します。

こんどふき出した三号は、昨年の7月31日、二号がふき出して間もなくとりかかったもので、狭雲荘の東側、松川本流と澄川の合流点付近です。深さは1370mまで掘り下げました。一号の950m、二号の1100mにくらべて、一番深いわけです。ふき出した部分での温度が300度と、二号の場合と同じ、ふき出すお湯の量は毎時70トンということです。これ一本だけでも、8000KWの発電が可能ということです。前の二本も7000から8000KW発電がそれぞれ可能ですので、これらの三本をまとめて、年内には2万キロまでの試験発電をはじめるといことで、すでに機械の準備にとりかかっています。

松川温泉道路が広がる

ところで、発電用の設備をするとなると、機械を運ぶ道路が問題です。もちろん、いまのままの松川温泉線では道幅もせまいし、途中の木橋などでは重い機械を運ぶことはできません。そこで、昨年6月の県議会であの松川温泉線は、林道から二階級特進で県道に昇格し、道路の幅も5.5メートル、木橋も永久橋にかけかえられることになりました。

また、松川温泉のある地域は、国立公園の中にふくまれていますので発電事業によって、自然美を傷つけてはいけないという配慮から、厚生省や林野庁とあらかじめ協議の上、41年度の送電までに腐食試験などを行って、万全を期すことになっています。一方、通産省には発電所の建設の申請を出し、すでに新年早々認可もおりていますので、雪どけを待って建設工事に着手する予定ということです。

発電後のお湯の利用も

発電に使ったあとのお湯は、どのように利用されるのだろうか、という質問をよく聞きます。具体的なものはまだ固まっていますが、一応考えられていることは、レクリエーションといった娯楽施設、それに地熱温室や植物園といった計画もあるようです。

いずれにしても、松川温泉を中心とした一大観光地を形づくるものと思われ、“観光松尾”の発展にとって、ことしは画期的な一年になりそうです。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第170号」1965年



図 3-2-6 出そろった蒸気3本

出典：旧松尾村「広報まつお第170号」1965年

(4) 感動の極、第四の火ともる

1966（昭和 41）年 10 月 12 日、第四の火がともる。静寂な湯の煙たなびく松川の地に、高さ約 50m の冷却塔がそびえ、日本で初の地熱開発をもたらす発電機とそれを操作するメカニズムの粋を極めた、ぜいたくなばかりの科学の殿堂は、ついに完成した。火力、水力、原子力発電よりも安いコスト、1kW3 円という地熱発電は日の目をみた。苦節 12 年の偉業である。

完工式のこの日、鈴江新技術開発事業団理事長はいみじくも、この日の感動を次のように述べた。「今日からは、松尾の松川でなく、“世界の松川”になったわけです」けだし、名言、至言というべきものであろう。また、1970（昭和 45）年 10 月 11 日、岩手国体の折には、松川渓谷の紅葉まばゆい中を、天皇、皇后両陛下が、地熱発電所をご視察になり、従業員の人たちに親しく声をかけられ、労をねぎらわれた。

一方、松川地熱発電所は学術的にも貴重な存在として注目され、全国の中学校や高校修学旅行コースにも含まれ、脚光を浴びた。

■村報まつお 第 209 号 昭和 41 年 10 月 1 日

秒読みに入った地熱発電 松川

12 日に落成式

松川地熱発電事業がついに実を結ぶ日がやってきました。昭和 31 年新技術開発事業団から開発を委託された東北工が、総工事費 20 億円を投じて進めてきましたが、12 日現地で落成式を行います。いよいよ落成式のあと本格発電が始まります。そして発電に使われたあとのお湯は大規模遊園地などにも活用する計画もあって、松尾にとって新しい“夜明け”といえましょう。



参考資料：旧松尾村「広報まつお第 209 号」1966 年

■村報まつお 第 211 号 昭和 41 年 11 月 1 日

“第四の火” 遂にともる 松川発電所

今日よりは“世界の松川” 日本で初めての“地熱発電”が遂に完成しました。まさに“世紀の一瞬”といえましょう。10 月 12 日。この日の松川地熱発電所では“世界のニュース”が鮮やかに描かれていました。

最大の功労者は、初代社長の富岡重憲氏

より真実を知ってほしいという意味でいいますと、最大の功労者は、初代社長の富岡重憲氏です。社内の反対にあいながらも信念と情熱と忍耐で成し遂げた。社内では常に大きな反対ばかりでした。なぜ反対があるのか。それは地熱の場合、最初の投資が非常に大きいからです。

ではなぜこのような大きな投資の決断をしたのかといえば、電力が欲しかったんです。日本重化学工業株式会社の主産業は、フェロアロイといって、鉄の脱硫剤をつくる会社だった。製品の約 3/4 が電気代だともいわれていました。その電力が欲しかったんです。当初、富岡重憲社長は水力発電を考えていましたが、なかなかやれるところがありませんでした。

地熱開発において難航した問題

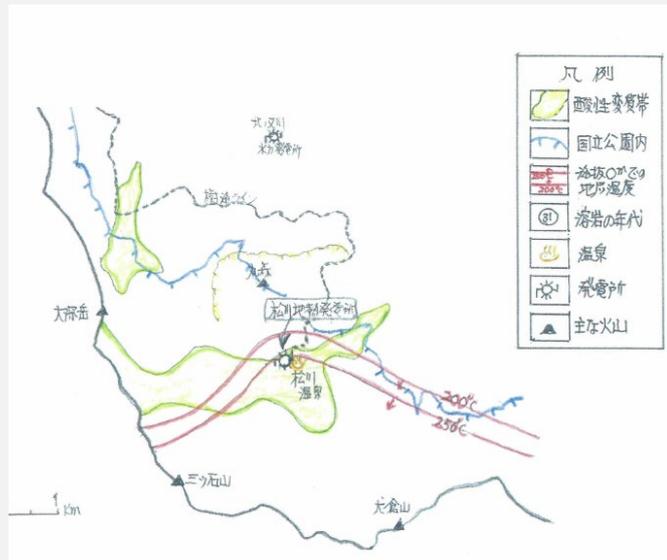
科学技術の進歩がありましたが、地熱噴気の場所を技術的に特定することは、世界的にみてもかなり難しいことです。

それは相当の理論と経験がないと、地熱を掘り当てるといえることはできないと思います

松尾村はじめ、林野庁との調整、環境省との調整、地域住民の理解などでは、一般的にはたくさんの方の難関、乗り越えるべくハードルがあります。ただし、松川はあまりにも順調に行っているため、参考にならないかもしれません。

地熱開発の許認可を得るには、一般的には 12 年～15 年ぐらいかかると思います。特に、大きなハードルになるのは、①地元の理解と協力、これがないと何も始まりません。②温泉審議会の理解と協力、③環境アセスメント、ということができると思います。このように地熱発電は長い年月を要しますし、それまでは発電料金はゼロですから、会社の体力もそれなりに必要になります。

また、技術面では、いま若い人はコンピュータやAI、最新のシステムを使った仕事は得意なのですが、やはり、現場にいないと実際に分からないことが多いんです。泥まみれになって経験を積まないと、地熱層を当てられない、成功しないと思います。



八幡平市における地熱の賦存状況
出典:佐藤浩氏作成より

とくに次世代に伝えたいこと

やはり地元の人たちが地熱のことを分かっていないんですね。一時期、小学校の社会科の教科書に地熱が出たことがあるんです。そういうふうな形で、地熱のことがやはり教育の方面に入っているといいなと思っています。八幡平市ではこんなことをやっているんだということを学校で教えていけば、それで家に帰って話題にもするでしょうし。私は学校の現場で地熱を取り上げていただき、ぜひ拡げてほしいなと思っています。

テキストをつくるのであれば、あまり詰め込まない方が良くと思います。どうしても日本人の癖で素材を詰め込みますが、どこを見たらいいのかが分からない。肝心なところがどこなのかが分かるように、バラっとでもいいんで、そのような工夫してはいいかがでしょうか。

語り手:佐藤浩氏(元日本重化学工業(株)地熱事業部副事業部長兼盛岡工業所長)

2.2.4 観光開発 -契機となった国立公園化運動

(1) 観光発祥の地、松川温泉

「松尾の観光」といえば、すぐ、「八幡平」、「八幡平温泉郷」、「竜ヶ森」、それに「松川」と素描される。こうした旧松尾村の観光を支えるパターンの中で、しかし、最も古く、その起源ともされる由緒深いテロップは、松川温泉である。いわば、松川温泉は松尾村の観光発祥の地ということになる。その松川温泉は今から約 250 年前に発見されている。ともあれ、松川温泉は、かなり古い時代から開発が進められた。しかし、やはり、本格的な観光開発は終戦後にゆだねられることになる。

(2) 八幡平地域一帯の国立公園化運動

当時の村長藤根順衛氏は、観光が将来村にとって大きな産業になることを力説し、松尾村振興白書の中で、観光開発のラインを打ち出していた。また、当時助役だった沼田宗一氏は、このころの「村報大松尾」に執筆し、八幡平を中心の観光開発を訴えるキャンペーンをはって、すでに今日への理論的なスタンバイを行っていた。

1950（昭和 25）年 2 月、後藤川取入口の完工式に参列した岩手県知事国分謙吉氏は、岩手山、八幡平を県立公園に指定することを検討中であることを明らかにした。また、松尾村は松川温泉に村立の温泉保養所を設置し、近郷近在の住民の保養の場として開発を進めてみてはどうか、などの話を持ち掛けてきた。

このような諸般の動きから、県と関係町村が一体となって、県立公園よりも、むしろ国立公園に指定してもらおうべきだという点で一致して、これが、やがて国に対しての八幡平地域一帯の国立公園指定の運動へと昇華していった。

まず 1950（昭和 25）年 7 月、国立公園調査団が来県した。八幡平地域の現地調査が早速行われて、その結果は「八幡平は国立公園としての価値は十分に備えている」ことを確認して、調査団は一応帰京した。ところが、厚生省と関係各省との意見統一のための折衝は必ずしもスナリとは進まなかった。同時に全国各地からの立候補地区も多くなり、競走はいやが上にも激烈を極めた。

1954（昭和 29）年 8 月 23 日、松尾村民にとって注目の審判は下った。国立公園審議会を開いて最終答申が求められたが、その結果は、われわれ村民の期待を裏切って「八幡平地区」は「国定公園」の指定にとどまった。

この「国定公園」の指定で、村民はもちろん、全県民の期待を空に浮かせた前述の結果の後も、しかし、ひるむことなく関係方面に対する国立公園昇格のための陳情は、波状的に、絶えず続けていった。この期待にこたえるかのように 1955（昭和 30）年 7 月、厚生省国立公園部計画課長千葉哲磨氏が来村、八幡平地域一帯を再び綿密に調査して帰った。この調査がどうやら決め手になり、ついにわが村に朗報をもたらすことになった。

1956（昭和 31）年 7 月に開かれた国立公園審議会で八幡平地域は国立公園としての価値として指定の必要性が強調されたことが、各委員の賛意を促した。

審議会もこれを認めることになり、待望の国立公園昇格が決定した。ただし、この指定に当っては、既に指定されている十和田国立公園に編入という扱いになって、その名称も「十和田八幡平国立公園」となった。この編入という考え方は国としては新しく国立公園の指定はしない建前であったため、政治的な配慮によるものだったといわれる。

(3) 次々と整備される観光施設

国立公園に編入指定が決まる間の数年間にも、この八幡平を中心とした地域の施設は、次々と整えられていった。

国立公園は国民の健全な憩いの場でなければならない、という趣旨から 1950(昭和 25)年ごろ、茶臼山ろくに登山用のヒュッテをまず建設した。さらに、1951(昭和 26)年暮れから 1953(昭和 27)年 2 月にかけては、藤七温泉にも「ヒュッテ」が完成した。そして翌 3 月には、高松宮殿下が八幡平においてになられ、スキーツアーを楽しまれて、新築成ったばかりの藤七ヒュッテにご一泊された。寒気きびしく、しかしまた、樹氷のこよなく美しい冬の八幡平を心ゆくまでたんのうされて、お帰りになった。

一方、1952(昭和 27)年、第一次松尾村総合開発計画の中で、特に八幡平国立公園指定促進と道路新設促進を取り上げ、関係方面に強く働きかけることが決った。また、松川地域には村営の保養所建設も正式に決定して、1955(昭和 30)年から工事に着手し、1956(昭和 31)年 6 月に完成した。木造二階建てで 40 人の収容能力を持ちこの当時のこの地方の温泉場としては有数のものとして人気を呼んだ。また、電灯設備がなく、ランプ生活の情緒あふれるものだった—というのは現代からみた表現で、当時のランプ照明が、後年、蒸気による発電のきっかけにもなった。

国立公園指定前後の観光開発の様相は目を見張るものがあった。特に指定後のそれは、一気に坂道を登りつめていくようなハイ・スピードで積み重ねられていった。

- 1957(昭和 32)年 6 月、松尾村観光協会が発足した。
- 1958(昭和 33)年 11 月、県営養鱒場が金沢口に開設された。
- 1960(昭和 35)年 11 月、八幡平観光株式会社が資本金 2300 万円で発足した。
- 1960(昭和 35)年 12 月、「八幡平ユースホステル」が建設された。
- 1962(昭和 36)年 6 月 17 日、松川温泉の村立保養所狭雲荘は、厚生年金の還元融資を受けて、総工事費 36,127,000 円で建てた。
- 1962(昭和 37)年 12 月、松尾鉦山地区から大黒森までの延長 1,507m に及び夏冬兼用のリフトが完成した。これに伴って周囲を伐開して、八幡平国立スキー場もオープン、冬山登山やスキー客にとっては、もちろん、夏山登山者にも大いに利用され、喜ばれた。しかし、後年、八幡平有料道路の開通で、夏山登山の利用者が激減したことから、1974(昭和 49)年から夏山リフトは廃止された。

(4) 大型観光への展開と、「八幡平温泉開発株式会社」の設立

観光開発は、昭和 40 年代を目前にしたところから、大型化への様相を深めていくことになり、点から線、そして面への道をひた走る。そのはしりは、1962（昭和 37）年の八幡平観光ホテルの完成である。八幡平観光に最も欠けていたのは宿泊施設といわれていた時期だけに、これは大歓迎だった。これまでは、ユースホステルやヒュッテしかなかっただけに、この本格的な鉄筋建てのホテルの完成は、収容能力も百人余りであり、まずはスタートとしては上々の出来であった。

続いては道路ということで着工したのが、八幡平有料道路の前工事ともいべきリフト口からは八幡平山頂までの砂利道の完成である。そして、1970（昭和 45）年 5 月 1 日、その名も八幡平有料道路、アスピーテラインと命名、名実ともに開通した。この八幡平有料道路の建設に歩調を合わせて、同じ 45 年 5 月には、山頂駅付近に県営レストハウスが完成している。

一方では、八幡平国立公園の東登山口の要衝である金沢地域に、ニジマスの庭園、「トラウト・ガーデン」がオープンした。1966（昭和 41）9 月 14 日に、岩手県観光開発公社の経営で、県営養鱒場の隣接の地に建設されたものである。これは、自分の手で釣ったニジマスで、その場で料理して賞味するという趣向で、観光客から喜ばれた。この後、1968（昭和 43）年になって、岩手県では明治百年記念事業の一つとして、本村の金沢、松川地域を含む約 1,500ha の地域に「県民の森」を設定し、この「県民の森」の一部、金沢地区で、1974（昭和 49）年 5 月 19 日に第 25 回全国植樹祭が開かれた。

■村報まつお 第 306 号 昭和 45 年 10 月 15 日

お好きなマス養殖にご満悦 天皇、皇后両陛下下行幸啓

天皇、皇后両陛下は、岩手国体秋季大会開会式ご臨席のあと、10 月 11 日わが松尾の松川地熱発電所と県営養鱒場へ行幸啓なされました。

この日は、格別の快晴に恵まれ、両陛下は松川路の紅葉に讃嘆なされ、地熱発電所では科学の粋を集められた公害のない発電事業をご激励になられた。そして、県営養鱒場ではお好きな魚類の視察なので、小松場長のご説明を身を乗り出すようにして聞き入れ盛んにご質問を發しておられ、ご満悦のごようすでお帰りになられた。



写真 3-2-7 天皇、皇后両陛下下行幸啓

参考資料：旧松尾村「広報まつお第 306 号」1970 年

このほかには、八幡平温泉郷の誕生がある。そのきっかけは八幡平ハイツのオープンである。これは 1970（昭和 45）年に、中小企業雇用促進事業団がレクリエーションセンターとして建設したものである。この年 9 月 28 日に盛大な起工式を行い、総工事費 6 億円で着工、1971（昭和 46）年 12 月 1 日完工、落成した。この八幡平ハイツの誘致が引き金になって、これより先 1971（昭和 46）年 10 月 10 日に松川地熱発電所から約 6 km の区間、引湯することに成功した。この引湯の事業を行うために、県と日本重化学工業株式会社と松尾村の共同出資で「八幡平温泉開発株式会社」を設立した。

このお湯を引いて、八幡平ハイツがまずオープンし、ついで、日商岩井の経営になる「ライジングサンホテル」、そして、村の企業の手になる「七滝」や「松尾旅館」も相次いで建設された。その後も、「八幡平リゾートホテル」（昭和 54 年・1979）や「八幡平ロイヤルホテル（昭和 63 年・1988）など、次々に建てられていった。

■村報まつお 第 334 号 昭和 46 年 12 月 15 日

粉雪舞い“八幡平ハイツ”オープン

待ちこがれた岩手中小企業レクリエーションセンター、八幡平ハイツは、11 月 25 日、約 300 人の参列者の手で、その落成を祝福された。式場の娯楽ホールには千田知事をはじめ、和田勝美中小企業雇用促進事業団副理事長、野原、増田両代議士らも顔をそろえ、全国で 5 番目、しかも、約 6 億円を費やした超モダンなハイツの威容に参列者は感嘆していた。同ハイツは 12 月 1 日にオープンし、中小企業に勤める人、その家族のほか、一般にも格安の料金で利用してもらう、ということになっている。

参考資料：旧松尾村「広報まつお第 334 号」1971 年



図 3-2-7 「八幡平ハイツ」オープン

出典：旧松尾村「広報まつお第 334 号」1971 年

八幡平温泉郷の歩み

1970(昭和 45)年に旧松尾村の第三セクターとして、八幡平温泉開発(株)を設立しています。当時は松尾村として、いち早く温泉供給を根幹とした観光産業の振興に岩手県と一体となり大きなプロジェクトに取り組み、現在の八幡平温泉郷に至っています。

そうした中で、当社の温泉給湯工事も順調に進捗し、1971(昭和 46)年から別荘の第一期分譲が開始され、同年「八幡平ハイツ」がオープンするとともに、数年後にはホテル等も次々に営業が開始されています



我々はもう半世紀の歴史のある会社だから、それらの分かっていることを残して
次の世代に伝えていかなければならない

いまいえるのは、藤根村長と沼田村長は偉大だったということ

その当時、1945(昭和 20)年代頃から藤根村長と沼田村長は地熱開発に対して強い思いを持っていたと思います。1952(昭和 27)年頃が松尾鉱山の最盛期らしい。そして、1955(昭和 30)年代に入ってくると松尾鉱山は下降ぎみになっていったと言われています。

昔、松尾鉱山で仕事をしている人は、給与と役場の 3 倍ほどもらっているんだと、そのことを考えた時に、下の村の農業をやっている人たちと格差がありすぎると。所得の格差なり、生活の格差なり、ということも村長たちは考えたらしい。

その当時の 1952(昭和 27)年頃、松尾鉱山のアパートには、いわゆるセントラルヒーティングが入っていました。ところが、下の生活は薪ストーブで、風呂も五右衛門風呂でした。その辺から、これでは松尾村はダメだという思いがあったらしい。で、何かをやらなければならない。そこで、先輩方が肅々と検討を進めていったらしいです。

県の担当レベルの職員と思いを共有しながら、様々な補助事業を導入し、進めていったということがすごいなと思っています。とにかく、新農耕をはじめ、農業所得を上げるという施策が次々と展開された、というように記憶しています。

温泉開発による雇用の創出

八幡平温泉開発(株)を設立し、温泉郷の分譲もしますが、その分譲(不動産業)は、最初は村でやったんです。そこには、沼田村長が考えていたことを着実に実行に移していったというような、そんな背景があったんじゃないかと思っています。

これらは自分たちの財源だけでは太刀打ちできないと、で、県を巻き込んでやった。特に県の観光開発公社との連携はすごかった。当時、国有地は基本的には第三セクターでないと開発できなかった。主体は民間であっても、地域の団体が入らないと国有林の開発はダメだ、と国から言われていました。それで、リゾート開発なんかもそうですが、開発の手段として地域も参加して第三セクターを構築した、そういうことらしいです。

温泉開発による観光振興によって、雇用に創出するということは沼田村長が求めていたことでもあったと思います。

語り手: 畑 孝夫氏(株八幡平温泉開発常務取締役)
田中耕輔氏(株八幡平温泉開発総務部長)